巻頭言

「協同の發見」雑感

向谷地 生良（北海道医療大学/浦河べてるの家/総研理事）

私は、自分が住んでいる北海道日高の浦河町を紹介するとき「いま、道内で一番、交通の便が悪く、かつ、貧しい地域です」と言っている。事実、福岡県（人口510万人）とほぼ同じ面積を持つ日高は、管内人口の減少が続き７万人を切り、経済や暮らしやすさの統計的な指標の多くが悪い方で常に道内で一番である。

今から40年前、この町に住み、統合失調症などをかかえる若者たちと起業を目指す中で試行錯誤をし、「金儲けをしよう」を合言葉に日高昆布の袋詰めの下請けをはじめたのが現在の「浦河べてるの家」である。他の人には見えないものが見えたり、聴こえない声が聴こえ、しかも、その中身が往々にして辛く、自分を貶める内容だったりする人たちが、共に働き、暮らしあえる条件を、試行錯誤を重ねながら見出し、それを活かし、分かち合いながら事業を続けてきた。「この町で暮らしてもっとも惨めなことは７病棟（精神科病棟）に入院すること」と言われる中で、そのもっとも惨めな経験を強いられ、貧しさを抱えた一人の若者を中心にはじまった起業は、危機を経るごとに拡大し、90人のスタッフをかかえる事業体となり、地域の過疎化とは、反比例するように成長を続けている。この成長を支える大切な理念が「今日も、明日も、明後日も、ずっと問題だらけ、そして、それで順調」という「降りてゆく生き方」であり、そんな目線から生まれたのが「過疎も捨てたもんじゃない」という理念である。

この40年、町の人口は４割近く減り、地域の経済活動も半分近くに縮小する中で、この１年をふりかえっても、メンバーとスタッフは、イギリス、フィンランド、韓国、イタリアを飛び回り、毎月のように海外から視察者が絶えず多忙を極めている。先週は、ニューヨークのマンハッタンから商談が舞い込み、海外の研究者とメールやスカイプで情報交換をする機会が増えている。

その経営・実践スタイルの集大成が「当事者研究」である。この当事者研究は、今から16年前に、“爆発”が止まらない一人の青年を前にし、なすすべもなく沈黙せざるを得なかったとき、二人の間に生まれた「どうしていいかわからないから一緒に研究しよう」という言葉から生まれたものである。実

は、この「一緒に研究しよう」という言葉に、一番救われたのは私自身であった。それは、何も解決していないのに、何かが解消した瞬間であり、私にとっての「協同」の原点でもある。

この当事者研究は、従来、研究対象であった統合失調症などをもつ人自身を、「自分の研究者」として立ち上がらせ、研究者としての当事者の存在が、理論と実践など、さまざま信念対立によってかい離、断絶してきた領域を統合し協同をうながす可能性が注目されるようになった。そして、2015年には、東京大学先端科学技術研究センター（先端研）に「当事者研究領域」というあらたな学問体系が立ち上がった。その広がりを象徴するのがこの８月に刊行された医学、哲学、社会学、心理学、社会福祉学などさまざまな領域の研究者、実践者によって編まれた「みんなの当事者研究」（金剛出版）で、アマゾンでベストセラーになるなど、静かなブームを呼んでいる。

３年前、東京で開催された当事者研究の全国交流集会を見学したイタリア、トリエステの精神科医ロベルト・メッツィーナ氏が感想で述べたのが「Recovery is Discovery」（回復とは、発見である）だった。精神医療において、従来、「発見」の主体は、研究者であり、精神科医などの専門家であり、当事者は「発見」の成果を、つねに享受する立場にあった。しかし、当事者研究は、「発見の主体」としての当事者や市民の可能性を重視してきた。しかし、それは、伝統的な専門家に対して、当事者や市民の優位性を主張するものではない。大切なのは「Co-Production」（協同的創造）なのである。

その意味でも、もうすぐ300号を数える「協同の發見」は、時代の方向を見据え、先見性と普遍性をもち、時代の変革をうながす重要なキーワードであり、実は、協同労働の歩みと運動は「働く当事者研究」という、壮大な社会実験であり、そのプロセスなのである。